

✦ 奥田あやと囲碁体験 ✦

指導者も必読！ ゼロから分かる

# 入門 エッセンス セミナー



奥田 あや 三段

time 3

こんにちは。入門講座の第3回です。

まずは簡単に前2回のおさらいから始めることにしますが、より詳しくお知りになりたい方は日本棋院のホームページ内からPDFでその内容をダウンロードできるようになっています（本コーナーのみ=11ページ参照）ので、そちらも合わせてご覧になっていただければと思います。

## 前回までのおさらい

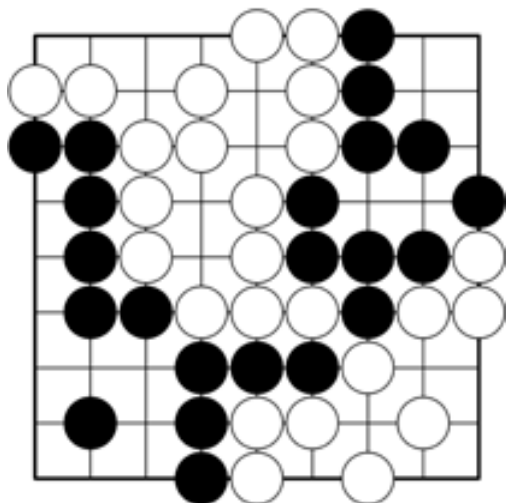
囲碁とは「囲った陣地の多い方が勝ち」というゲームです。

1図をご覧ください。囲碁の対局が終了した形の一例です。右上と左下の黒石で囲ってある部分が黒の陣地、左上と右下の白石で囲ってある部分が白の陣地となり、それぞれを「黒地」「白地」と呼びます。

そして「どちらの地が多いか」が勝敗を決めるのですが、数えるのはマスの数ではなく、碁盤の線と線が交わる交点です。そ

の単位として「目」という用語を用い「1目、2目……」と数えていきます。

では1図の地を数えてみてください。



1図

### Profile おくだ あや

東京都出身。大淵盛人九段門下。平成16年入段。23年三段。東京本院所属。第27期女流本因坊戦挑戦者決定戦進出。第22期女流名人戦リーグ入り。第4回大和証券杯ネット囲碁レディース準優勝。

黒地は右上が7目で左下が11目ですので、計18目。白地は左上が9目で右下が7目ですので、計16目。従ってこの勝負は、黒の2目勝ち——これが囲碁というゲームの基本的な勝敗の決め方です。

ただし囲碁には「石を取ったり取られたり」という出来事が発生し、そうした「石の取り方」については今月号でこのあとお話しするのですが、それはとりあえず脇に置いておき、まずは「取った石をどう活用するのか」についてお話しします。

2図をご覧ください。盤上の石の配置は先ほどの1図とまったく同様です。従ってこのままなら「黒の2目勝ち」ですよ。

しかし、ここに至るまでの過程で「石を取ったり取られたり」が行なわれたと思ってください。その結果が碁盤の上下に記してある黒石と白石の数です。つまり、白が取った黒石の数が5個、黒が取った白石の数が2個ということになります。

そして取った石のことを「アゲハマ」と呼ぶのですが、このアゲハマをどう活用するのかというと、対局が終了してお互いの地を数える時に——、

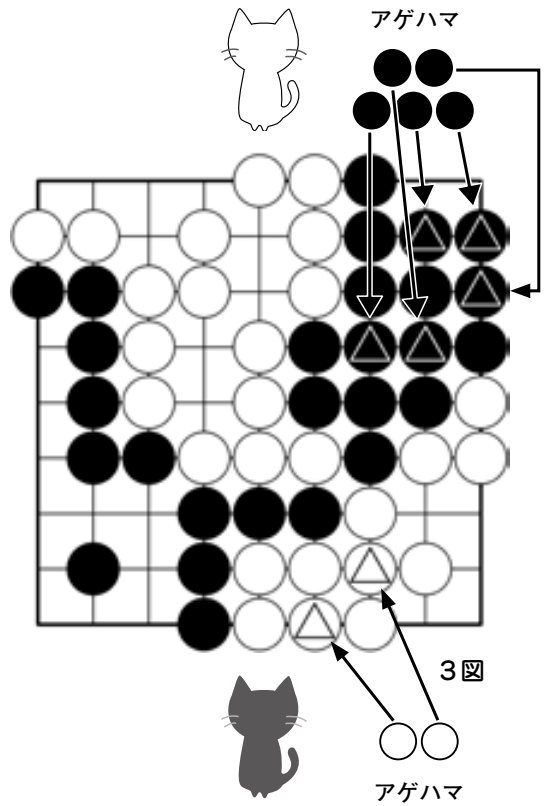
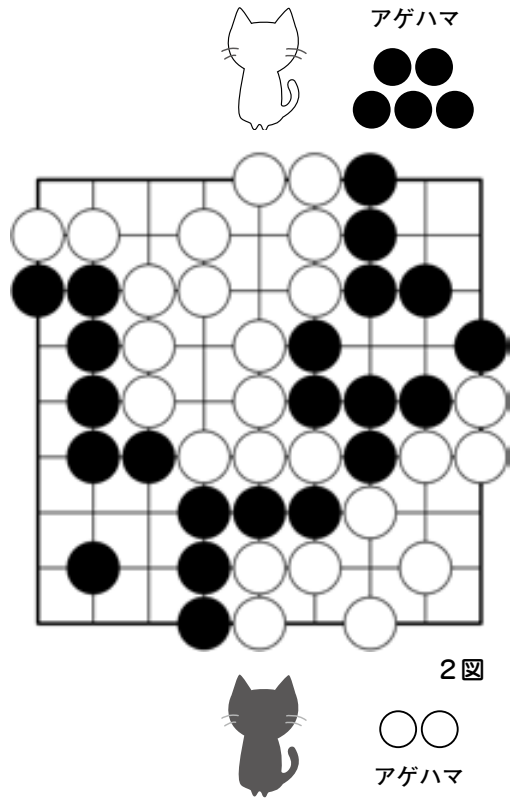
・アゲハマで相手の地を埋める

ことができるのです。つまり、取った石が多いほど「相手の地をたくさん埋めることができる」ということですね。

それを図で示したのが3図です。

白は取ったアゲハマ5個で、黒地を5目埋めることができます。黒はアゲハマ2個で、白地を2目埋めることができます。なお埋める箇所は、どこでも構いません。

この結果、黒地が18-5目で13目に、白地が16-2目で14目になりました。従ってこの勝負は「白の1目勝ち」が最終結果ということになるのです。





いかがでしたか？ 以上が前回までの内容です。アゲハマの数によっては、盤上での数字と結果が逆転することもあるということですね。

では今月の本題となる「石の取り方」についてお話ししていきましょう。「いかにしてアゲハマが発生するのか？」がテーマとなるわけです。

## 石の取り方＝ポン抜き

4図をご覧ください。

このような状態で黒1と打てば、△の白石を取ることができます。

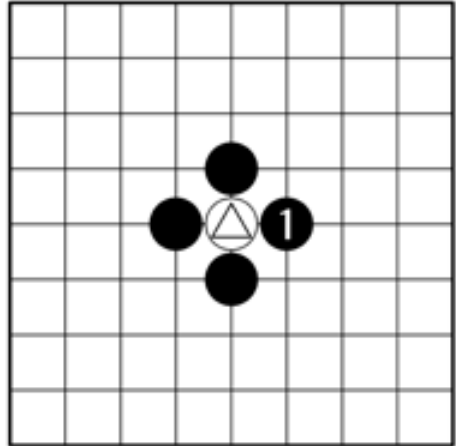
「取る」とはどういうことかと言いますと「盤上から△を取り除いてしまうことができる」ということで、その結果としては5図の状態になります。

そして取った石は、碁石を入れてあるケース（碁笥と言います）のフタの中に入れてください。で、このフタの中に入れた石こそが「アゲハマ」に他なりません。

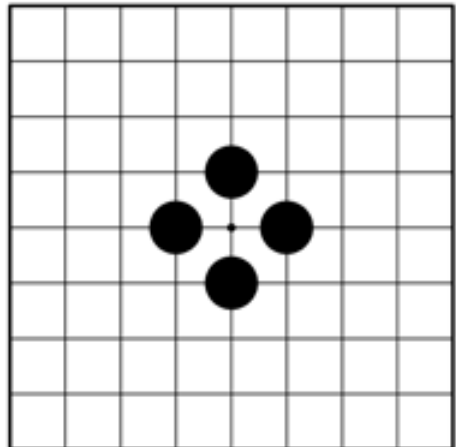
こうして相手の石を取ることを「ポン抜き」と呼ぶのですが、この際に気をつけていただきたいのは、ポン抜く側の石（4図と5図の場合は黒石）の位置関係です。白石に対し、四つの黒石がすべて密着していますよね。この状態になって初めて、白石をポン抜くことができるのです。

どうということかと言いますと、6図のような状態では、白石をポン抜くことはできないということなのです。確かに白石を四つの黒石で囲ってはいますが、白石に対してどの黒石も密着していません。覚えたばかりのうちには、どちらも同じに見えてしまうかもしれませんが、4図&5図との違いをよくご確認ください。

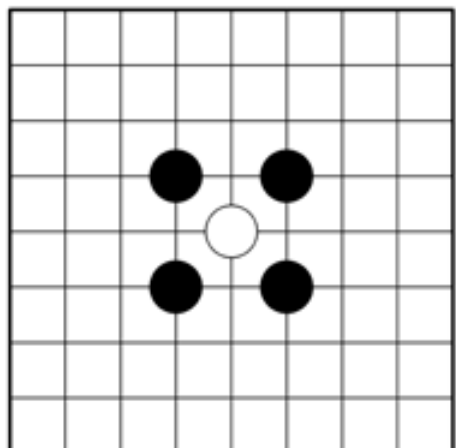
以上が「ポン抜き」の基礎知識です。



4図



5図



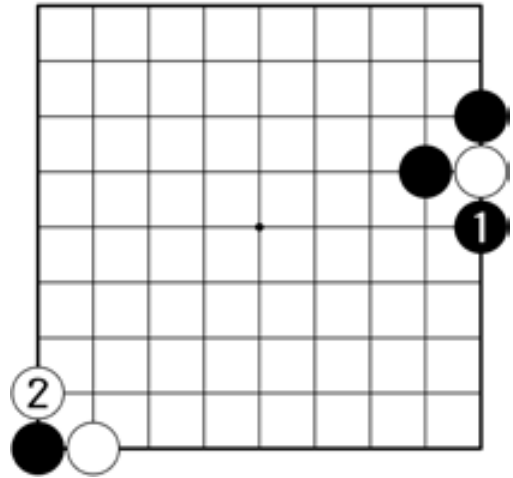
6図

## 盤端の石も取れる

では、続いて7図をご覧ください。碁盤の端のことを「盤端」と呼びますが、この「盤端の石も取ることができる」というお話です。

まずは右側ですが、黒1と打てば白石をポン抜くことができます。ここはもう碁盤の一番端で断崖絶壁なので、黒石は三つで事が足ります。白石の右側に黒石を置く必要はないということですね（置こうとしても置くことができませんが…）。

では次に左下隅です。ここは端の端ですから、石は二つで充分——白2と打てば黒石を取ることができることは、皆さんもうお分かりでしょう。



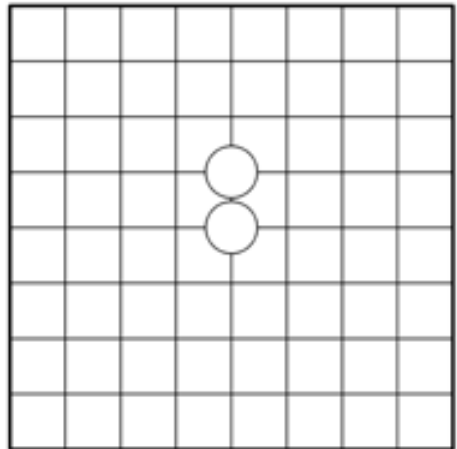
7図

## 複数の石なら？

ポン抜きの対象は、相手の石ひとつとは限りません。複数の石でもポン抜くことは可能なのです。

というわけで8図をご覧ください。

黒石をいくつ使っても構いません。この白石ふたつをポン抜いてください。



8図

### ★ 編集室からのお知らせ ★

本コーナーでは、4月号から入門講座を連載しておりますが、今月号（6月号）以降よりご購入いただいた場合、内容が途中からになってしまいます。そこで本講座に限っては、弊院ホームページのトップ画面中段にごぞいませ出版最新情報から「囲碁未来」誌のロゴをクリックいただき、そこからこれまでの記事をPDFにて確認できるようにしております。ぜひ新規ご購入者のみなさまにおかれましては、以下にまでアクセスいただければ幸いです。



上記のロゴをクリック

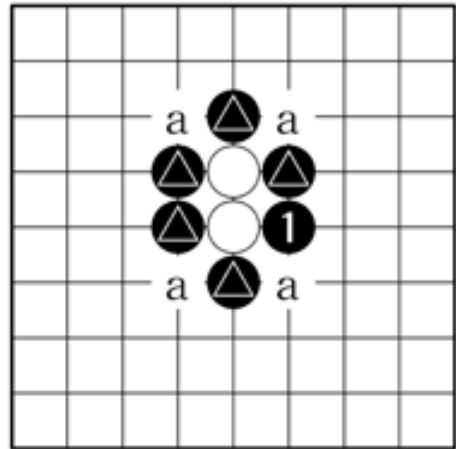
**URL** [http://www.nihonkiin.or.jp/publishing/2012/04/post\\_262.html](http://www.nihonkiin.or.jp/publishing/2012/04/post_262.html)



白石二つの取り方、お分かりになりましたか？ では解答として9図を掲げます。

五つの▲に加えて黒1——黒石六個でポン抜くことができます。前ページまでの内容をしっかりとご理解いただいていた方なら、簡単に答えが出せたと思います。

なおaに黒石を置いた方もおられたかもしれませんが、もちろんaに石があっても白石二つをポン抜くことができるので正解なのですが、aは絶対に必要というわけではありません。従って本図のように黒石6個でポン抜くのが最も効率が良い「ベスト解答」ということになるのです。



9図

A題

### 練習問題

では続いて練習問題を4つ、A～D題として出題させていただきます。

A題とB題、C題とD題は便宜上、同じ碁盤の中で掲げてありますが、個別の問題として考えてください。

それぞれ白石がいくつか固まっていますので、黒石を使ってポン抜いてください。

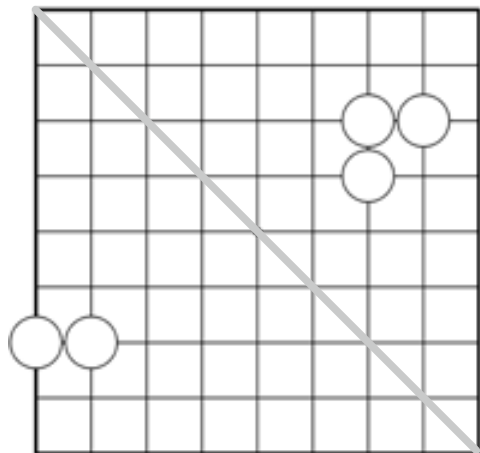
使用する黒石の数に制限はありませんが、前述したように、必要最小限の形で示していただければベストです。



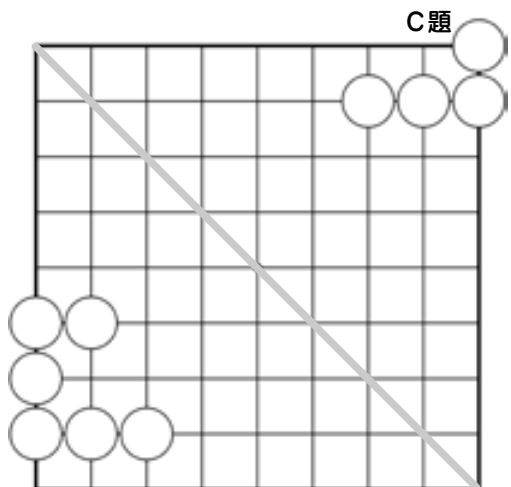
なお囲碁においては、石の個数を数える単位として「子」という用語を使います。

具体的な使用方法としては、黒石五個のことを「黒五子」、白石七個のことを「白七子」といった具合です。

というわけで今後、石数を表示する時は、この「子」を用いていくことにします。技術的なことと直接の関係があるわけではありませんが、用語を覚えることも囲碁入門の一環ですので、早めに慣れていただければ嬉しいです。



B題



C題



D題

四題とも特別難しいことはなかったと思うので、さっそく解答です。

**A題解答** ▲六子に黒1を加えた計七子で、白三子をポン抜くことができます。

**B題解答** ご覧のように黒五子で、白二子をポン抜くことができます。

**C題解答** ご覧の黒六子で、白三子をポン抜くことができます。「aの所に黒石が必要」と思ってしまう方も多いようですが、ここは必要ありません。

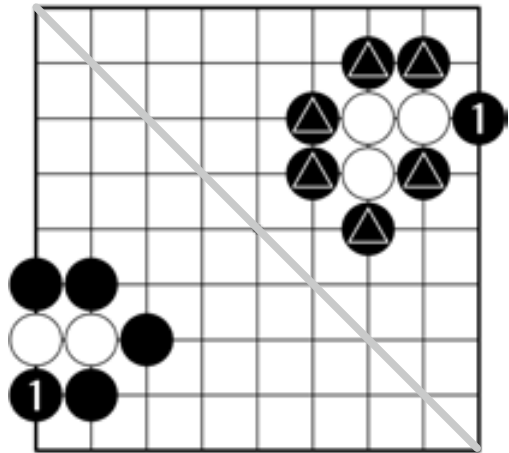
**D題解答** ご覧の黒八子で、白六子をポン抜くことができます。

さあ、いかがだったでしょうか? 「石を取る」という行為がどういうことか、お分かりいただけたことと思います。

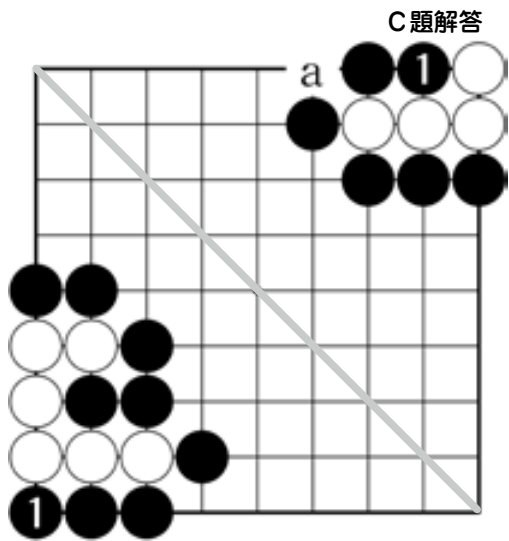
ただし当然ながら、囲碁とは黒と白が交互に一手ずつ打っていくゲームなので、この練習問題のように「何手も連続して打ち相手の石を取る」ことはできません。

こちらが「取りたい!」と思えば、相手が「取らせたくない!」と考えるのは当たり前——というわけで次ページでは、今までとは逆の立場となる「石の逃げ方」についてお話しします。

A題解答



B題解答



C題解答

D題解答

\*\*\* 九路盤セットと十三路盤セットのご紹介 \*\*\*

十九路盤のセットはお近くのおもちゃ屋さんや、小売店などで比較的簡単に購入できるが、九路盤や十三路盤セットとなると、店頭でみかけることは難しい。東京、大阪、名古屋ならば、日本棋院の東京本院、関西総本部、中部総本部があるのでぜひ一度足をお運びいただきたい。

遠方の方にご利用いただきたいのはインターネットを使った日本棋院オンライン囲碁ショップや、電話注文・FAX注文対応の通信販売である。

写真①の九路盤セット(¥1,470)は、裏は七路盤として、また写真②の十三路盤セット(¥5,250)は裏は九路盤としても使え、さらに携帯性も抜群でお値段も手ごろ。まさに囲碁の入門キットとしてはうってつけの人気商品だ。



①九路盤セット ¥1,470



②十三路盤セット ¥5,250

- 本院  
千代田区五番町7-2  
JR・地下鉄市ヶ谷駅より徒歩1分
- 八重洲囲碁センター  
中央区八重洲1-7-20 八重洲口会館9F  
(東京駅/八重洲地下街直通)
- 関西総本部  
大阪市北区角田町1番12号  
阪急ファイブアネックスビル6F
- 中部総本部  
名古屋市東区榑木町1-19
- 日本棋院通信販売センター  
TEL 03-3288-8788 (平日9:00~17:00)  
FAX 03-5275-6844 (年中無休 24時間受付)
- 日本棋院オンライン囲碁ショップ  
<http://www.rakuten.co.jp/nihonkiin/>



## 石の逃げ方

「あと一手でポン抜くぞ!」「次に一手打たれたらポン抜かれてしまう……」という状態を、囲碁用語では「アタリ」と呼びます。

10図がまさにその状態ですね。次に黒がaと打てば、△一子をポン抜くことができるわけです。

ではここで、白の手番だったらどうすればいいのか？ これは特に難しい話ではないはずです。

そうです、11図の白1と打てばいいのですね。こうして逃げ出しておけば、もうこの白二子が取られることはありません。

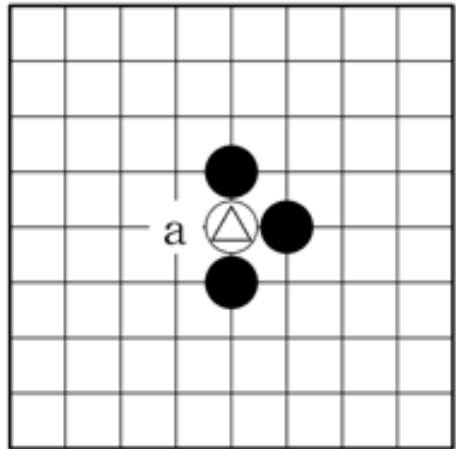
なぜならば、黒がこの白二子を取るためには、このあと三手連続でa、b、cと打たなければならないからです。囲碁とは、黒と白が一手ずつ打つゲームですから、相手に三手連続で打たれることはあり得ません。

そして10図と11図の関連で注目していただきたいのは「10図の黒aと11図の白1が同じ箇所である」という点です。つまりアタリになっている石を逃げる時には、次に相手に打たれるとポン抜かれる箇所に打てばいいということなのです。

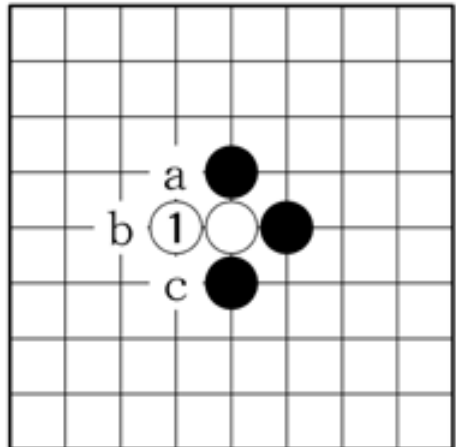
これは実はポン抜きに限った話ではなく、これから皆さんが囲碁を楽しんでいく上で、あらゆる場面で応用の利く考え方です。即ち、格言にもなっている「敵の急所はわが急所」ということですね。

では続いて、練習問題です。E題とF題、それぞれアタリになっている白石を逃げてください。

取ることのできる石数は違いますが、急所は1点のみです。

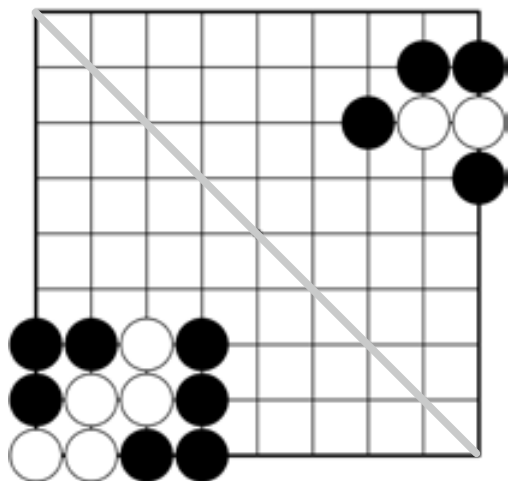


10図



11図

E題



F題

では解答です。

**E題解答** 白1と打つことによって、白二子を逃げ出すことができます。

**F題解答** 白1と打つことで、白五子を逃げ出すことができます。

いずれも「敵の急所はわが急所」でしたよね。これでもう、石の逃げ方については万全だと思います。

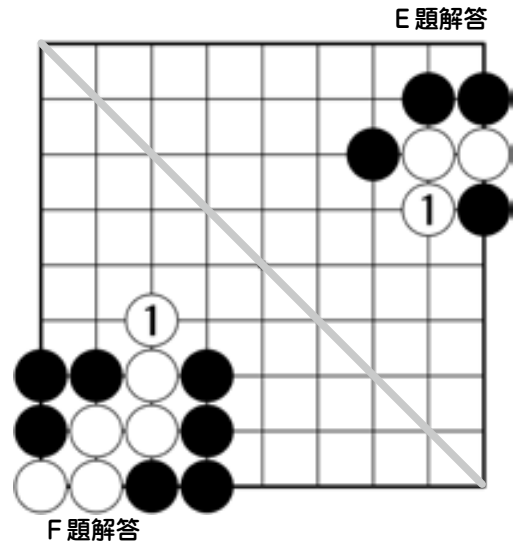
## 次回予告

今月は「石の取り方と逃げ方」についてお話ししました。

前2回で説明してきた「アゲハマ」がどうやって発生するのが、お分かりいただけただけなことと思います。

そしてこの時点で改めて確認しておきたいのですが、囲碁とはあくまで「最終的に地の多い方が勝ち」というゲームであるということです。相手の石をたくさん取れると気持ちがいいので、石の取り方を覚えるとなついつい石を取ることにばかりを目指してしまいがちですが、囲碁の最終目的はそうではないということです。

アゲハマはあくまでも、最後に相手の地



を埋めるためのもの。いくらたくさん相手の石を取っても、それで埋めきれないほど相手の地が大きければ勝負には勝てないということを、もう一度ご自身の中で確認してください。

では次回ですが、石の取り方と逃げ方についての続編——レベルアップしたお話をしようと思っています。

囲碁の醍醐味の一つである「石を取ったり取られたり」に、いよいよ足を踏み入れて行くということです。

## 指導者の方へ

今月は「石の取り方」についてお話ししました。来月号では、お互いの石がアタリになっている状態での練習問題を解いていただく予定です。

この「石を取ったり取られたり」の練習問題はパズル的な要素を含んでいるので、このあたりから入門者の興味がグッと増してくるのですが、この時

に教える側として重要になってくるのが、話の所々に「でも囲碁というのは最終的に地の多い方が勝ちというゲームなんですからね」という確認の言葉を挟むことです。

取った石はあくまでも、最後に相手の地を埋めるアゲハマとしての役割である——この点を入門者の方に理解してもらうことが、この後をスムーズに運ぶための秘訣だと考えています。